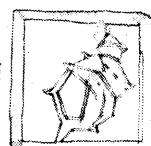


子どもの生きがい

田中祐次



はじめに

「子どもの生きがい」について、心理学を学んだ親としてどう考えるかを書くようにと、編集部からの依頼に、私も一男一女の二人の子どもをもつ親として、何か書かなければならぬだろうと思いながら承諾してしまったことを、今さらながら後悔しないわけにはいかない。

最近盛んに使われる、この「生きがい」ということばについて、私なりに自分の生きがいは何だろうなどととりとめなく考えたことは、一度や二度はあったわけであるから、私なりに書けないことはないと簡単に考えたわけである。しかし、考えてみると、この課題には、「子どもの」という条件がつけられているのである。さらに、心理学を学んだ親として、それを論じろというのであるから、ことがち

よつとめんどうになるのである。私にとっては、「心理学を学んだ」というよりは、「現実に二人の子どもの親として」という点に重みが意識されすぎてしまうのである。どうも、私の学んだ心理学がはたして子どもの「生きがい」に貢献しているかどうかが問われているような気がしてならないのである。とにかく、私もこの際覚悟をきめて、この点を反省してみなければならないであろう。

ところで、「子どもの生きがい」ということについて書こうとすると、どうしても二つの方向が考えられる。一つは、「親として、子どもにはどんな生きがいを与えてやらねばならないか」ということであり、もう一つは、「子どもはいったい何を生きがいとして感じているか」ということである。そこで、私はここで一応この二つの方向からこの問題を考えてみようと思うが、結果的にはこれが一つのも

のに一致することこそがのぞましいことはいうまでもないであろう。

しかし、その前にもう少し「生きがい」そのものについて考えておかなければならない。

「生きがい」の背後にあるもの

私は、「生きがい」というのは、本来、「生まれてきてよかった。生きていてよかった」と思うところに感ずる主観的な感情であると思つてゐる。だから、その背後には、「生まれてきて損をした。生まれてこなければよかった」と思うこととも人間はあるのだということが前提としてなければならない。そして、「生きがい」などということばが盛んに使われる裏には、現代においては「生きていてもつまらない」というような、生まれてきたことへの後悔を感じることがいかに多いかを裏書きしているのだともいえる。

たしかに、長い人生の間には、人はしばしば「自分の生きがいは何だろう」と考えることがあるものである。しかも、それは、きまつて自分が何か人生に行きずまつた時とか、方向を見失つた時とかに限られているようである。私

もかつて「いったい自分は何のために生まれてきたのだろう」と考えたことが、いくどとなくあつた。そして、あげなせ僕を生んだの?」と問うたものであつた。しかし、今にして思えば、この問いほど、親にとつてつらいものはなかつたであろうと思うのである。親は、子を仕合せにしてやりたいと思うほどには、それを達成できないことに、常に無念の気持ちをもつてゐるものである。その中で、子が親に発するこの問いは、それが、その背後に、生まれてきしたことへの後悔の意味があるとなれば、なおさら親の胸をしめつける。

親の生きがい

それにしても、人はいったい何のために子どもを生み、育てるのであろうか。

人口問題研究所がまとめた最近の調査によると、現代の親たちの子どもについての考え方が、一時代前とくらべてかなり変化していることが明らかになつてゐる。それによると、大半の親は、「子どもがいると家庭が明るくなるから」というマイホーム型であり、「国の将来に必要だから」

という人口国力型や、「老後の支えになるから」という老後依存型は、二位三位になつていて、しかも高齢者にそれが多いという結果を得ている。

この調査からもうかがえるように、最近の若い親たちは、老後のめんどうを見てもらいたいとか、お国のためになる人を育てるというような打算や義務で子を生むようなことはしなくなっている。

私自身について見ても、なぜ子どもを生み、育てているのかといえば、それは、子どもを生み、育てることを通じて、夫婦としての自分たちがより完全な人間になるということ、もう少し、別のことばでいえば、子どもとともに生活することを通して、自分を歴史的に理解する機会を多くし、それだけ人生を豊かにしたいという気持ちからであったといえるであろう。だから、その意味では、子どもは「光」ではあるが、やはり、道具であるということになるかもしれない。とはいっても、もちろん、その子どもが時々刻々と成長し、やがて成人して自分たちのような大人になるということや、その過程においては「光」どころか「闇」を招くこともあるかもしれないということとも考えなかつたわけではない。そればかりか、彼らが成人となつて

生きるであろう世界は、今のわれわれの時代とどちらがつてくるかも考えてみた。

二〇年後には、地球の人口は今までいくと倍以上になるかもしれないということ。地球は狭くなり、食糧は不足し、公害はますますひどくなるかもしれないということ。自然が破壊され、人は生命を維持するためのあらたな戦いをしなくてはならなくなるかもしれないということ。他方、発育していく過程での種々の不安も想像すれば限りがない。交通事故にあって片輪になることはないだろうか。あるいは、幼くして命を失つて、自分たち親を悲しませるだけの存在になるのではなかろうか。食品公害はどうか。ガンにかかりはしないか等々。

こんな不安をおして、それでもあえて、子どもを生み、育てるのは何のためなのか。そう考へてもみた。まして、一〇年、二〇年後になつて、子どもがいっぱいの理屈を親に向かつていうようになつたとき、「こんな住みにくい世の中になぜボクを生んだの?」と聞われたら……。

こんなとりとめのない不安に思いをめぐらしながらも、とにかく自分たちが二人の子どもを生み、育てることになつてしまつてしているのは、やはりさきほど書いたような理由

によると考へるほかはないであろう。もはやこれ以上は、生んでしまったことをわびる以外にはないのかも知れない。

親が与える子の生きがい

でも、もう少し考へなおしてみよう。とにかく生んでしまったとはいへ、親にとっては、子どもがいることはなん

といつてもひとつ生きがいであることにはちがいない。「親」としての生きがいとは何かと問われれば、それはやはり「子ども」であるということになる。もし親が、子を生み、育てることを後悔しているとすれば、これほど子どもにとつて不幸なことはないであろう。こう考えてくると、子どもにとつてのまず第一の生きがいは、親自身が子どもを生んで育てるにとつて喜びを感じることであるということになる。親が子どもを「生きがい」とするということ、このことこそが子ども自身をして「生まれてきてよかつた」と思わせる第一条件になるのではないかろうか。

しかし、ここでひとつ誤解のないように注意しなければならないことがある。それは、ここでいう親の生きがいといふものは、けつして、老後に世話をなろうとか、親以上に立派になつて親の果たし得なかつた夢を実現してもらお

うとかいうような期待をかけた上での生きがいということではないということである。「親に喜ばれる子になる」とか、「親の生きがいになる子」ということが、もし、そのように親の打算的計算の上に、子どもへの期待として一方的に課せられるなら、それは子どもへの一種の圧迫となることは必定である。

かつて、親孝行という名によるこの種の子への強制がいかに多かったことかを私たちは思いおこさなければならぬであろう。生み、育ててやつたのだから、その恩に報いるために子は親孝行するのが当然だという考え方。これほど身勝手な子どもへの期待が、もはや時代遅れであることを、賢明な現代の親たちは知つてゐるはずである。子どもには子どもの人生が、生まれた時から始まっているということ、そのような別個の人格をもつた者に対しても、他者が自分の意のままの方向づけを強制することは、親といえども許されるはずはないのである。まして、親が、自分たちの生きがいのひとつとして、子を生み、育てているのであれば、それだけで満足するべきであり、許される唯一の子どもへの期待は、子どもが生まってきたことを後悔することなく、『生きがい』を感じる人生を生きてくれるようになつてくれ

れと願うこと、それだけなのではなかろうか。

そして、そのような「子どもとともに生きる」ところに生まれる「親の生きがい」こそが子どもに「生きがい」を感じさせる一つの条件となるのである。「生きがい」とは、「生きがい」を感じて生きている者とともに生きるところに生まれるものと考えるのである。

子どもが示す「生きがい」の姿

ようやく話が心理学的になつてきたところで、もう少し子どもの心理に目を向けてみよう。

私はどうも、元来子どもを心理学的に観察することがに手な方である。それは、ひとつには私が自分自身遊び好きで、子どもと遊ぶ時にはついつい自分が遊びに夢中になってしまふからだと思っている。だから、私の子どもに対する観察は、どうしても、客観的な観察というよりは、後の内省になつてしまい、必然的に主観的になりやすい傾向を否定できない。それでもできるだけ客観的に場面を思いおこしながら、わが子を見つめなおすこととしよう。

四歳を過ぎたわが子を思いうかべて気づくこと、それは、彼が最も充実している時というのが、私や妻にご機嫌とり

でなく本当に一緒になつて遊んでもらつてゐる時であるといふことである。そして、それはいうまでもなく私や妻にとつても充実した人生の瞬間でもあるのである。たぶん、こんな時には、彼は「生きがい」を感じているのだと思う。私や妻を、わが物のように独占し、高まる自発性の中で、次々と遊びを創造して私たちをおどろかす。私たちがそれに応じていくかぎり活動はエスカレートする。ついにストップがかけられる。彼は一瞬我にかえつて、不審な顔をする。そして、悪いことをしてしまったかもしれないという罪悪感からか、急に体を小さくして私の顔色をうかがう。そんな時の悲しげな彼の顔、そこには親を悲しませてしまつたかもしれないという後悔と、自分を受容してくれないことに對する怒りの表情が見られるのである。私たちがいだく「期待はずれ」の感情が、彼をして「生きがい」を喪失させたことは明らかである。そして、それは、同時に、私たちにとってもちよつとした不幸なのである。親である私たちとしては調和のとれた活動の仕方というものを持たが早身につけてくれること、そして、いつも互いに仲よくいられるようになりたいと願わずにはいられない。

「生きがい」の成長

「子どもの生きがい」ということを考えるに当たって、私はこれまで、それに対応するものとして「親の生きがい」について触れるを得ないままに述べてきたわけであるが、それは「生きがい」というものが、ただ単にひとりの人間の中に存在するべきものではないという私の人間関係論的な発想を暗に示したかったからである。「生きがい」とは、人が人間として生きる過程で相互的に生ずるものでなければならないし、また、そのようなところに生ずる「生きがい」こそがほんとうの意味で生産的なものであるのだと思うのである。そう考えるならば、「生きがい」論が盛んになるゆえんが、現代社会の大きな特徴である人間関係のうすれという一種の人間疎外の傾向の流れの中にあるという解釈もうなづけるであろう。

このことを子どもの世界にあてはめて考えるならば、幼児にとっての生きがいは、はじめはなんといつても親子といふ人間関係の中にこそ生まれなければならないといえる。そして、それは成長するにしたがって、やがて、子ども同志という仲間関係の中に子ども自身が見いだしていくようにならなければならぬ。親はその基盤を親子関係を通じて子に育ててやらねばならないのである。

しかし、一方親には親としてだけではなく、ひとりの大人としての人生がある。幼児が常に親とともにいたいと欲しがりとも、そればかりを許すわけにはいかない。父親は仕事を通して社会という場に参加することによって「生きがい」を求めなければならないし、母親もまた妻として、夫との関係を通して社会へ参加しているのである。大人の「生きがい」とはそうした広い世界の中で感ずるべきものなのである。だとするならば、わが子の成長を願い、それを一つの生きがいとする一人の親として、同時にまたひとりの大人として、私は彼もまた「生きがい」を感じることのできる人生を送る大人になつてほしいと願わないわけにはいかない。そして、そのためこそ、親である私も、一人前の人間として、常に「生きがい」を感じながら人生を歩む努力をしなければならないと思う。そうすることこそが、やがて成人するであろう彼と、ともに「生きがい」をわかち合える第二の条件となるにちがいないと思うのである。